

# 日本とアジア（1937～1940年）

—— 田坂具隆の映画と地域開発 ——

片岡俊郎

## はじめに

私は、広島県東部を中心にして、地域開発論研究への関心を念頭におき、『福山大学学報、112号』（2007年4月）に、次のような趣旨の文章を寄稿したことがある。

平成の大合併により、広島県東部は、三原市、尾道市、福山市、府中市、世羅町、神石高原町の4市2町に集約された。

地域を語るには、産業基盤、生活環境基盤、保健・福祉・医療基盤、教育・文化基盤、行財政基盤、広域基盤で見るのが一般的である。平成の大合併により、6基盤同等に扱うのではなく、広域基盤に基づいて他の5基盤を見ることの重要性が増している。

他方、地域文明は、政治、経済、技術、文化で理解する必要があるが、とりわけ文化は、精神文化を指し、学術、芸術、宗教、教育等が問題にされる。したがって、地域の特色を理解するためには、精神文化に裏付けられた政治、経済、技術を問題にする必要がある。

広島県豊田郡沼田東村（現在の広島県三原市沼田東町納所）出身の映画監督、田坂具隆（1902～1974年）がいる。東京の「三百人劇場」で、2006年5月7日～28日まで「誠実一路、田坂具隆の世界」として、作品17本が上映された。パンフレットに田坂具隆、略歴として次のように記されている。

「1902（明治35）年4月14日広島生まれ。母と死別後、京都に移る。’24

年日活大將軍撮影所に助監督として入社。’26（大正15）年『かぼちゃ騒動記』で監督昇進。同年6作を監督し、6作目の『鉄腕記者』で伊佐山三郎カメラマンと出会い、’59年の『若い川の流れ』まで30年以上にわたる名コンビを組む。以後、多ジャンルに及ぶ作品を量産しながら、『月よりの使者』（’34）など一連の入江たか子主演作を大ヒットさせる。’37年に自身最も愛着があるという『真実一路』を発表、ヒューマンな資質を開花させる。戦争映画『五人の斥候兵』（’38）が絶賛され、次いで中国本土でロケした『土と兵隊』（’39）を放つが、同時に『真実一路』に続く『路傍の石』（’38）『爆音』（’39）の自称『片山明彦三部作』を監督し、絶頂期を迎える。戦争末期の’45年応召、広島で原爆の惨禍に遭遇し、長い闘病生活を余儀なくされるが、’49年『どぶろくの辰』で再起。製作を再開した古巣の日活に戻り、戦後初の秀作となった『女中ッ子』（’55）を発表。直後、太陽族ブームの中で石原裕次郎の初の本格主演作『乳母車』（’56）を監督、大長篇『陽のあたる坂道』（’58）で『裕次郎ブーム』の頂点となる空前の大ヒットを記録。日活を離れた後、東映で中村錦之助や佐久間良子の代表作となる名作を連打。特に『五番町夕霧楼』（’63）の美しい叙情の世界は、戦後の絶頂。『湖の琴』（’66）を最後に東映を去り、遺作『スクラップ集団』（’68）を撮った後は静かな引退生活に入った。1974年10月17日胃ガンにより逝去。享年72。生涯監督作品数は59。夫人は女優滝花久子。」

また、パンフレットに「誠実一路、田坂具隆の世界」として、次のように紹介される。

「昭和の産声とともに映画監督としての歩みを始めた名匠・田坂具隆。丹念な描写の積み重ねによって生みだされるそのヒューマンな映画世界は、日本映画の孤峰として屹立しています。戦時下においても反戦映画と見紛う描写に終始した『五人の斥候兵』と『土と兵隊』。後に、戦争賛美と指弾された『海軍』でも、母にご飯をよそう九州男児が活写されています。生まれ故郷広島

で被爆し、原爆症と戦いながら歩んだ戦後は、石原裕次郎、中村錦之助、佐久間良子らの資質を全面に開花させ、新たな日本映画史を書き加えました。『無技巧の技巧』という言葉そのままに、緻密な描写を丹念につないだ田坂のキャンバスに秘められた映画の秘密に迫るべく、上映可能な17作品を上映します。また日活多摩川で同時期に活躍した、田坂とは因縁浅からぬ島耕二の代表作4本を参考上映。」

田坂具隆監督の作品が、戦争映画においては、国の広域（国際）基盤を、また、映画芸術という点で精神文化を取り扱っていると考えれば、広域基盤と精神文化を尊重する地域開発論研究の立場から、作品は、田坂具隆監督の出身地三原市にまで目が行き、三原市から、広島県東部、広島県、中国地方、中国・四国地方、日本、アジア、世界へと拡がりを持つのである。田坂具隆の郷土を念頭に置くことによって、地域の人々にとっても、作品理解がより身近になる、と。

地域開発論研究への関心とは、地域開発論においては、上記した広域基盤からみる他の5基盤の重要性と精神文化に基づく政治、経済、技術（国家レベルになれば政治、経済、軍事、技術ということになるが、）の理解を必要とするからである。

映画監督田坂具隆で、具体的に考えれば、田坂具隆が最小行政単位である広島県三原市出身であり、母上の死後、京都へ移ることによって、中国・四国地方を越えて、関西地方まで拡がり、中国大陸での戦争を映画化した「五人の斥候兵」、「土と兵隊」では、田坂具隆の関心が日本からアジアへ向けられていることがわかる。

また、田坂具隆の前記2作品で、国家レベルの文明である政治、経済、軍事、技術が、精神文化に裏付けられているかどうかを問題にできる。前記2作品では、特に精神文化に裏付けられた軍事が問題の中心であることは明らかであろう。したがって、田坂具隆の前記2作品は、映画芸術からの軍事へのア

アプローチであり、田坂具隆の映画から「戦争と平和」の問題を考えることができる。

さらに、田坂具隆の前記戦争映画2作品を、行政の最小単位である市町村単位も含めて考えれば、国家間の戦争は、安心安全の問題と理解でき、広域基盤と結びつけて、地域開発論で問題にする行財政基盤を取り扱うことになる。

本稿では、田坂具隆の前記2作品、「五人の斥候兵」、「土と兵隊」を広域基盤と精神文化の観点から取り扱うことにする。

日本は、1937（昭和12）年7月7日、日中戦争を開始し、ドイツは、1939（昭和14）年9月3日、イギリス、フランスがドイツに宣戦を布告し、第2次世界大戦に突入する。イタリアが、イギリス、フランスに宣戦を布告するのは1940（昭和15）年6月10日である。日本が、日独防共協定に調印するのは、1936（昭和11）年11月25日ではあるが、日独伊三国同盟を結ぶのが、1940（昭和15）年9月27日である。田坂具隆の「五人の斥候兵」、「土と兵隊」が1938年と1939年製作の映画でもあることにより、地域開発論の研究として、「田坂具隆の映画と地域開発」をサブタイトルに、「日本とアジア（1937～1940年）」をタイトルとした。

なお、本稿で問題にする田坂具隆の戦争映画「五人の斥候兵」と「土と兵隊」は、上記パンフレットに次のように紹介されている。

「五人の斥候兵」は、「日中戦争の最前線を戦う北支派遣軍で、斥候に出たまま戻らない兵隊をひたすら待つ戦友や上官を描く。田坂の『愚直なまでの誠実さ』という個性が全篇を貫く作品。海外で受賞した日本映画の第1号。撮影は国内で行われた。キネマ旬報1位、ベネチア映画祭イタリア宣伝大臣賞。」

「土と兵隊」は、「中支杭州湾に上陸した兵士たちが、泥にまみれた強行軍をひたすら歩き続け、トーチカ攻略の実戦に至る。中国本土にロケした丹念

な状況描写の積み重ねが、驚くべき映画の興趣をもたらすドキュメンタリー・タッチの傑作。キネマ旬報3位。」

## I

私は、「平和」と「精神文化」との関係を念頭において、『福山大学図書館報、第2号』（2004年9月）に、「私が選んだ日本の古典、ベスト8」として次のような趣旨の文章を寄稿したことがある。

私の手元に小学館版『新編、日本古典文学全集』全88巻の案内パンフレットがある。「記紀、萬葉から西鶴、近松まで、頭注・原文・現代語訳の三段組み新編集」とあり、日本の古典が現代文で読めるようになった。

私は、歴史、文学の専門家ではないので、小学館版『日本歴史大事典』全4巻（2000～2001年）を参考にしながら、日本の古典、ベスト8を選んでみた。

私は、専門の貨幣論の立場から、イギリスの経済学者J.M.ケインズ（1883～1946年）と日本の実務家であり貨幣理論家でもある深井英五（1871～1945年）を比較しながら、明治以後、大正、昭和と日本の歴史を整理しつつある。

私は、日本近代史を、日本とインド、日本とヨーロッパ、日本とイギリス、日本と世界、日本とアメリカと区分した。「日本とインド（1890～1917年）」では、日本とインドは、両国とも、発展途上国であるが、日本は独立国、インドはイギリスの植民地、「日本とヨーロッパ（1917～1925年）」では、ヨーロッパの大戦を、アジアの日本人深井英五とヨーロッパのイギリス人J.M.ケインズがどのように第1次世界大戦を見たかで、第1次世界大戦期の日本とヨーロッパの区別を、「日本とイギリス（1925～1931年）」では、経済的側面から発展途上国日本と最先進国イギリスの違いを比較し、「日本と世界（1931～1940年）」では、世界の中で日本とイギリスが、アメリカが台頭す

中、軍事大国ではなく、経済大国への道を競い合えなかったかどうかを、「日本とアメリカ（1940～1945年）」では、第2次世界大戦期（太平洋戦争期）の問題であり、日本は直接アメリカと戦い、イギリスは、戦争遂行上、アメリカに協力・援助を求めざるをえなかったことに対応して、日本、イギリス両国とアメリカとの関係を分析してきてたどりついた結論である。以上の分析により、世界の最先進国への道は、現在我々が享受しているように、経済大国への途であり、第2次世界大戦前においても可能ではなかったかと思うのである。日本は、戦争を好む国ではなく、平和を愛する国であることを、世界に示すためにも、日本の歴史に目を向け、日本の古典、ベスト8を選んでみる。

私は、日本の古典を考えるに際し、我々に一番近い時代、江戸時代に注目することにより、日本の古典、ベスト8が選べれば、現在の日本も同時に把握されるのではないかと考えたからである。江戸時代の日本は、260余年にわたる平和な時代であり、文化が栄えた時代なのである。

江戸時代の古典といえば、井原西鶴（1642～1693年）、松尾芭蕉（1644～1694年）、近松門左衛門（1653～1724年）の著作をあげるのが一般的である。井原西鶴の世界が、庶民の男女の物語であるとするれば、貴族の男女の物語である平安中期の紫式部『源氏物語』をあげざるをえない。『源氏物語』は、日本の古典中の古典といわれるものである。

短詩形である俳諧の完成者、松尾芭蕉を念頭におけば、日本最古の歌集『万葉集』をあげることができる。『万葉集』は、長歌、施頭歌、仏足石歌、短歌、漢詩、文章を収めているからである。

近松門左衛門が、人形浄瑠璃の作者であることから、室町時代の能作者世阿弥があがる。人間を描くのに、世阿弥は人間に能面を着け、近松は人形で、人間の本質に迫ったからである。

平安以前の万葉集、平安時代の源氏物語、室町・戦国時代の世阿弥の能と

くれば、残り、他の二著作は、鎌倉時代の仏教思想を反映していると言われる鎌倉時代の軍記物『平家物語』、その延長線上に、江戸時代はといえば、江戸時代の儒教思想を反映した伝奇小説、滝沢馬琴『南総里見八犬伝』ということになる、と。

私が、明治以後、日本の歴史を整理しえたのは、世界的には、私の専門の貨幣論的立場から、金本位制を中心にして、国際金本位制期（1900～1914年）、再建国際金本位制期（1925～1931年）、金本位制離脱後（1931年～）と、時代を3期に区分したことを踏まえ、日本の特色を加味することによって、前述したように、明治以後（1890年以降）の日本を5期に区分したことによる。そして、1890年から1945年までを日本の近代国家形成史と把握できたのは、貨幣論的視角を日本の歴史に適用した結果なのである。本稿は、地域開発論の論文ではあるが、方法論的には、貨幣論的視角の地域開発論への応用であると言える。したがって、田坂具隆の映画も、以上の貨幣論的視角で取り扱うことになる。

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」、「土と兵隊」には、戦争映画である故、軍歌がしばしば挿入される。軍歌といっても、一様ではなく、戦意高揚のために歌われるもの以外に、歌詞により、記紀までさかのぼり、日本の古代の歴史から位置づけなければならないものも存在する。日中戦争を、日本の歴史の中で把握する場合、記紀、万葉、すなわち古事記、日本書紀、万葉集まで考慮する必要が出てくるのである。小学館版『新編日本古典文学全集』によって代表されるように、古典が現代文で読めるようになった現在、先学の研究は、本稿でも活用されることになる。地域開発論の分析用具に日本の古典が加わるのである。それでは、田坂具隆の映画「五人の斥候兵」から考察を開始する。

## II

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」（1938年）は、『日本映画作品全集』（1973

年、キネマ旬報社）に次のように紹介されている。

「38（日活多摩川）敵軍偵察の命令をうけて出発した五人の斥候兵が敵に包囲されながらも苦難をのりこえて責任をはたし無事本隊にたどりつくまでの話。北支事変の実話にもとづき高重屋四郎（田坂のペンネーム）が立てた原案を荒牧芳郎が脚本、田坂具隆が演出した。戦場における人間性を誠実に追求したもので戦時下につくられた多くの戦場映画中では群を抜く佳作と称され、キネマ旬報ベスト・ワンに選ばれた。小杉勇、伊沢一郎、見明凡太郎、井染四郎が共演。撮影・伊佐山三郎。（飯田）」（108 ページ。）

映画を具体的に検討するために、『日本映画 200』（1982 年、キネマ旬報社）の滋野辰彦氏の「五人の斥候兵」についての解説で映画を補足すれば、次の通りである。

「原作の高重屋四郎とは田坂のペン・ネームであり、脚色の荒牧芳郎は松竹で育った当時の有力なシナリオ・ライターであった。斥候に出る五人の兵士が所属するのは、北支那派遣軍の中の岡田中尉（小杉勇）を隊長とする百数十名の小部隊である。

ファースト・シーンは曠野の中の敵軍へ突撃を敢行する岡田隊である。全員が横隊となり駆け足で進む。眼前で地雷が炸裂して砂煙が高く上がる。兵士たちが塹壕を乗り越える。こうして岡田隊は小さな部落を占領する。城壁に囲まれ、上には望楼もある中国特有の村で、わずかの民家しかないが、前日まで敵兵がここに立てこもって頑強に抵抗し、岡田隊は全員で約 200 名いたのが、いまこの部隊に到着したのは 80 名だという。部隊は日本軍の最前衛として戦い、ようやくこの地を占領したのであり、これから前方には約 500 名の敵部隊が隊勢を整えつつあると推測され、その後方には、さらに大きな主力部隊が控えているはずである。

休養した兵士たちは、水をくむ者、炊事班の食事用意、西瓜やアヒルを手して来た兵士など、戦時特有の動きが始まる。甘い物が欲しいなという声、



握りの寿司、トロが食べたいなあ、と言う正直なつぶやきなどが聞こえる。戦争の殺気だった空気は溶け、部隊がなごやかに一体となっているように見えるのは、共通の敵を前にして同じ運命と状況の中に全員が置かれているからである。この日常的な兵士たちの行動を描いた場面を見ていると、いつも温かい目で人間を見つめてきた田坂らしい演出が、ここでもはっきり出ているのが感じられる。

岡田部隊長は到着すると、すぐ後方の本隊に伝令を出して報告し、細かな陣中日（誌）記を記録する。後方から病院自動車に着き、負傷した数名の兵士が、みんなに別れを告げて後方へ輸送される。戦争の悲惨な状態や残酷な描写は、ここにはない。まだ支那事変と呼ばれた戦争であり、一般に残忍な戦闘場面を人々は好まなかったし、田坂の映画には元来そんな描写はほとんどなかった。

後方との連絡で日本の新聞が部隊長に届けられる。何日か前の日付であろうが、隊長はそこに支那事変について下された天皇陛下の勅語が掲載されているのを見て、藤本軍曹（見明凡太郎）に全員集合と命じ、『謹んでこれを捧読する。』

勅語は例によって難しい漢語を多用したわかりにくい文章だが、要するに『朕は中国と協力して東アジアの安定を確保したのだが、中華民国はその真意を解せず、みだりにことをかまえ、ついに今度の事変になった。軍が出動したのは中国に反省を促すためである』という文意である。

そこへ後方の本部から伝令が来て、本部は総攻撃準備を開始した、岡田部隊は前面の敵情を偵察して報告せよ、との命令を伝える。そこで岡田は藤本軍曹以下の5名を選び、前面の敵情を探り、三時間以内に帰隊せよと命令して斥候に出す。これが五人の斥候兵であり、藤本軍曹のほか中村上等兵（井染四郎）、木口一等兵（伊澤一郎）、遠山一等兵（長尾敏之助）、長野一等兵（星ひかる）である。

五人は藤本軍曹の指揮に従って、平坦な草原の道を駆け、背丈よりも高い芦をかき分けて小川の流れを歩み、対岸を十名くらいの敵が横切るのを発見して身を隠し、不意に敵のトーチカ（堡塁）にぶつかる。

ここで敵の小部隊と衝突し、5名は周囲を囲まれて危険になる。この映画の中のいちばん激しい戦闘はこの場面である。軍曹は4名に敵情報報告の要領を伝え、各自がばらばらに散らばって敵の攻撃を分散させ、だれでもいいから一人だけは部隊に帰れるように計画する。4人は軍曹の命令に従い、後方を目掛けて走り出す。敵の銃弾が飛んでくる。軍曹は4名を援護して攻撃を続けている。そこで場面はフェイドし、次は5名を待つ部隊に移る。

予定より、2時間も遅れているのに、まだ一人も帰って来ない。斥候の身を心配して待つ部隊長と隊員たちの心づかいが、この映画でいちばん重要な部分であり、田坂監督が細心な描写を示している個所である。

やがて泥まみれの藤本軍曹が帰ってくる。彼が隊長に報告を終わったころ、長野一等兵が帰ってきたが、途中で落ち合った遠山と中村は、斥候長の藤本と木口が見えないので、探しに引き返したと言う。

ここで、みんなの心配はいっそう強くなる。藤本は先に帰隊しているが、そうなる木口が不安である。長野が思わず『木口、生きていろよ』と叫ぶ声には悲痛な響きがある。そこへ遠山と中村が帰隊するが、木口は見つからず、彼の鉄兜が落ちていたのを持ち帰った。

陽が落ちて歩哨線は雨にぬれて煙るときもあり、緊張の中の抒情的な静けさとして用いられている。

岡田部隊長は木口の身を案じながら、彼のために搜索班を出すことを禁じ、本部には戦死の報告をする。帰って来た4人が木口を探しに行かせてくれと頼むが、隊長が彼を説得して思いとどませたあとで、木口は北斗七星で方向を探り、疲れ果てて帰着する。この間に彼は敵との交戦に発射弾数23発を使ったと報告する。

ついで部隊は4分隊全部が人員点呼を行い、総勢84名が夜明けを期して攻撃に進発する。本部へは伝令が走り、午前5時の前進攻撃と木口の無事生還を報告し、部隊は隊伍を整えて城門を出て行く。海行かば水浸く屍、山行かばの曲が合唱で聞こえている。」（110～111ページ）

### Ⅲ

田坂具隆は、映画「五人の斥候兵」において、指揮官に日本刀を振りかざさせるのに対し、略奪した西瓜を兵士に青竜刀で切らせる。占領した望楼もある中国特有の部落とあわせると、映画の場面は本土日本ではなく、中国大陸であることを示す。

次に、休養している兵士たちにすきやき、まつたけ、さんまの匂いを思い起こさせ、握り寿司のトロを食べるしぐさから、甘い物のぜんざいを食べたいに及び、故郷からはるか離れた土地での会話であることを確認する。

さらに、岡田部隊長が、副官に口述で陣中日誌を書かせる場面を示す。岡田部隊長が日誌にこだわる理由は、一つは日誌をつけないと気がかりなためであり、二つは日誌を読むことによって勇気が湧くからである。

また、部隊には、兵士のうちで重傷者が二名、軽症者が七名いるが、重傷者の一名は寝たきりであり、他の一名は、何とか自分の身の回りの世話と他の一名の重傷者の看病はできる状態である。迎えに来た病院自動車に、寝たきりの一名は乗らざるをえないが、他の一名は、乗ろうとしない。岡田部隊長自らが、負傷の手当てをせよと兵士に命令を下し、兵士をしぶしぶ自動車に乗せる。

さらにまた、岡田部隊長が、兵士全体にこの戦争の目的は、東亞の平和を目指すことであることを、天皇陛下の言葉を踏まえて兵士に徹底させる。

なお、映画での五人の斥候兵が斥候に向かう土地は、大陸中国の土地であり、中国の土地には、小川があり、背より高い芦が生えている。一方、映画のな

かに登場する部隊の占領した部落は、間違いなく中国の部落であり、一本一本の木々、陽が昇る朝明け、陽が落ちた夕闇、月夜、雨夜も中国の村の光景なのである。

田坂具隆には、中国大陸での戦争を扱った映画「土と兵隊」(1939年)がある。『日本映画作品全集』(1973年、キネマ旬報社)に次のように紹介されている。「39(日活多摩川)日支事変下、敵前上陸した日本陸軍の一小隊が泥にまみれながら敵と交戦し炎熱の中支戦線を進んでく。火野葦平のベストセラー小説から笠原良三、陶山鉄が共同脚色、田坂具隆によって演出された。中国に現地ロケし実写風の大作。小杉勇、井染四郎の共演で戦時中の出色編。(飯田)」(171ページ。)

『日本映画 200』(1982年、キネマ旬報社)で、佐藤忠夫氏は映画を次のようにまとめている。

「(第1部は、次の通りである。)北京郊外で日中両軍が衝突して日中戦争が始まったのは1937年7月だが、初め北京や上海の周辺の局地戦で切り上げるつもりだった日本軍は中国軍の抵抗の根強さを知ると、11月に上海の南方の杭州湾に大部隊を上陸させて一気に本格的な全面戦争に持ち込んだ。この映画の発端は杭州湾に向かう輸送船団の中で故国に別れを告げる兵士達の情景である。その中に玉井伍長(小杉勇)を長とする分隊の面々もいる。彼らは、上陸に成功し、海岸から奥地へと、泥田の中を前進する。ちょっとした戦闘があり、戦死者も出る。彼らは戦死した友を悼みながらさらに前進する。強行軍であり、落伍者も出るが、泥まみれになって全員目的地で落ち合うと、互いの泥んこ姿を笑っていたわり合う。さらに強行軍は続き、ゲリラ的に出没する中国兵のために撃たれる者も出る。病気で倒れる者もあり、部隊の前進から取り残された者たちを助けるために玉井分隊は、そこに残る。だが、彼らを野戦病院に収容すると直ちに本隊の後を追いかねばならない。すさまじい泥道を兵隊達は、ひたすら歩き、くたくたになり、それでも歩く。

第2部では激しい戦闘が描かれる。玉井分隊の所属する中隊は命令を受けて敵陣に突撃する。トーチカが多数あり、玉井分隊はその一つに肉薄して奪取する。トーチカの中には、まだ少年の中国兵が一人だけ、逃げられないように足を鎖で縛られて残っている。中国軍が敗走したあと、小さな村を占領した小隊は、つかの間の平和をのんびりと楽しむ。しかし間もなくまた出撃命令が出て、大部隊の果てしない行進が始まる。」（131 ページ）

田坂具隆の映画「土と兵隊」は、第1部と第2部から成るが、整理すれば第1部は、中国大陸への日本軍の上陸篇、中国大陸での日本軍の行軍篇であり、第2部は、中国大陸での日本軍と中国軍の戦闘篇、中国大陸で占領した部落での日本軍の一時休息篇の4篇といえる。

第1部、上陸篇では、大隊から中隊、小隊へと上陸作戦の伝令様子と、船上での上陸前の宴会を催す兵士、船倉で馬の世話をする兵士が描かれる。

行軍篇では、上陸篇で登場した馬は、荷車を引く馬と上官を乗せる馬であることがわかる。行軍は、上官は馬で、兵士は歩いて行なわれるのである。玉井伍長の率いる分隊は、玉井伍長以下14名である。行軍中に二人の兵士が行軍から脱落する。一人は敵弾による大腿貫通であり、他の一人は、持病の胃けいれんが悪化したことによる。二人を引き取るために、分隊の兵士達が前進出来ず迎えに行かざるをえないが、分隊長は疲れているとの兵士たちの判断により、玉井分隊長一人だけが残される。分隊長が手に取って故国をなつかしむのが、故国に残して来た二人の子供の写真を見ることによってである。

第2部、戦闘篇では、攻める日本軍、守る中国軍の激しい戦いが描かれる。戦争状態の中で、敵も味方も区別できず、難民化した中国人に向けられた、中国兵の射撃も玉井分隊によって目撃される。難民が去った後、子供の泣き声を聞き、玉井伍長は危険を顧みず助けに向かうが、瀕死の母親のそばで泣いている子供に毛布をくるむのが精一杯である。戦場では、流れ弾に当たっ

た兵士は「天皇陛下の御ために」という言葉を残してこと切れる。また、戦場での喧噪<sup>けんそう</sup>の中で、虫の音が聞こえている場面で、兵士に、「どこに居るのだろうか」「何をしているのだろうか」とつぶやかせ、無政府状態の戦場が別の角度から描かれる。

一時休息篇では、占領した部落で、玉井伍長に「生きていることはありがたいことだ」と言わせ、池に咲く蓮の花と合わせて示す。映画は、上官の前で玉井伍長の手紙が検閲されている場面を示し、玉井伍長の戦場での人間関係が深まってゆく状況の家族への報告を、上官がわざわざ朗読し、手紙の内容から上官ともども戦争に勇気づけられる様が描かれる。また、病气胃けいれんで脱落した兵士が、一時休息中の分隊に原隊復帰することが示され、原隊復帰した兵士により、他の一名の敵弾で負傷した兵士は搬送<sup>はんそう</sup>されたことが報告される。荒廃した部落での休息もままならず、分隊はさらなる戦地へ向かって、上官は馬で、兵士は徒歩で前進する長蛇の列の場面で、映画は終わっている。

#### IV

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」（1938年）では、最後に「海行かば」の曲が合唱で聞こえ、「土と兵隊」では、映画の最初と最後に「海行かば」の曲だけが流されている。

「海行かば」（1937年）とは、大伴家持作詞、信時 潔作曲で、歌詞は「海行かば、水漬くかばね、山行かば、草むすかばね、大君の、辺にこそ死なめ、かえりみはせじ」である。

大伴家持の歌詞は、『万葉集』第18巻「陸奥国<sup>みちのくのくに</sup>で金が出たとの詔書<sup>しろうしょ</sup>を寿ぐ歌一首と短歌」からとられている。『新編、日本古典文学全集 第9巻』（小学館）、『万葉集』（1996年）の現代語訳で紹介すれば、次の通りである。

「葦原<sup>あしはら</sup>の 瑞穂<sup>みずほ</sup>の国を 天降り<sup>あまくだ</sup> 君臨<sup>みすえ</sup>された 天孫<sup>みすえ</sup>の 御末<sup>みすえ</sup>の天皇が 幾代

も <sup>あま</sup>天つ神の御領土として 知ろしめした <sup>おほのみよ</sup>大御代ごとに 治められる 四方の国々は 山も川も 広大なので奉る <sup>みつぎ</sup>貢の宝は 数えきれず 挙げ尽せない しかしながら わが<sup>おほのみ</sup>大君が 諸人に 仏の道を唱導され 大仏建立という素晴らしい事業を お始めになったが 黄金が 果してあろうかと 思われて ご心痛遊ばしていたところ (鶏が鳴く) <sup>あづま</sup>東の国の <sup>おだ</sup>陸奥の国の 小田郡の山に黄金が出ましたと 奏上したので <sup>しゅうぎ</sup>愁眉を お開きになり 『天地の <sup>しんぎ</sup>神祇も共に賞で <sup>め</sup>皇祖神の <sup>すめろき</sup>御霊のご加護もあって 遠い昔 このように金を産したことを <sup>わ</sup>朕が<sup>のみよ</sup>御代にも 再現したので この国は 栄えるであろう』と <sup>おほのみ</sup>大御心に お思いになり もろもろの 官人たちを励まして お指<sup>ず</sup>図のままに 老人も 女子供もめいめいの 満足するまで いたわって おやりになるので このことが <sup>かたじけな</sup>なんとも忝く いよいよもって うれしく思い <sup>おおも</sup>大伴の 遠い祖先の その名を <sup>おおくめし</sup>大久米主と 呼ばれて 奉仕した職柄<sup>から</sup>ゆえ 『海に行くのなら 水びたしの屍 山に行くのなら 草むした屍をさらしても 大君の <sup>そぼ</sup>お傍で死のう 後悔は しない (海行かば <sup>ゆ</sup>水漬く屍 山行かば <sup>む</sup>草生す屍 大君の <sup>へ</sup>辺にこそ死なめ <sup>かへり</sup>顧みはせじ)』と誓って ますらおの <sup>けが</sup>汚れなき名を 昔から今のこの世に 伝えてきた 栄えある家の子孫なのだぞ 大伴と <sup>さえき</sup>佐伯の氏は 先祖の 立てた誓いに 子孫は 先祖の名を継ぎ 大君に 従うものだと言い伝えた 名誉の家なのだ <sup>あざさゆみ</sup>梓弓を手に取り持って <sup>つるぎたち</sup>剣太刀を <sup>は</sup>腰に取り佩き 朝夕 常に警固し 大君の <sup>みかど</sup>御門の警備に 我らをおいて 人はまたとなかろう』と更に誓い 決意を固める 大君の 忝けない仰せが<また「を」> 承れば貴くて<また「貴くあるので」>

大伴家持の歌の時代的背景を全現代語訳『続日本紀(中)』(講談社学術文庫、1992年)によって説明すれば、次の通りである。

『続日本紀』には、天平21年(749年、天平感宝元年・天平勝宝元年)2月22日、<sup>みちのく</sup>陸奥の国からはじめて黄金を貢進した。そこで<sup>みてぐら</sup>幣帛を奉って畿内・

七道の諸社にそのことを報告した。」(72 ページ。)とある。

大伴家持の歌は、同年 4 月 1 日、「天皇は東大寺に行幸し、<sup>るしやなぶつ</sup>盧舎那仏像の前殿に出御し、北面して像にむかった。皇后・皇太子(阿倍内親王)はともに近侍した。群臣・百寮および一般の人民は分かれて前殿の後方にならんだ。天皇は勅して左大臣・<sup>たちばな</sup>橘宿禰<sup>もろえ</sup>諸兄を遣わして大仏に次のように述べさせた。(宣命体)」(73 ページ。)と「<sup>せんみょうたい</sup>從三位・中務卿の石上朝臣乙麻呂が、次のように宣命を述べた。」(74 ページ。)と記されている二つの詔書に基づくものである。

「海行かば」の歌詞は、後者、石上朝臣乙麻呂の詔書からとられている。次の通りである。

「また大伴・<sup>おおとも</sup>佐伯の宿禰<sup>さえき</sup>は、常にも言っているように、天皇の朝廷を守りお仕え申し上げることに、己の身を顧みない人たちであって、汝らの祖先が言い伝えてきたことのように、『<sup>みづ</sup>海行かば水漬く屍、<sup>かばね</sup>山行かば草むす屍、大君の<sup>かばね</sup>辺にこそ死なめ、のどには死なじ(海に戦えば水につかる屍、山に戦えば草の茂る屍になろうとも大君のおそば近く死のう。ほかにのどかな死をすることはあるまい)』と言い伝えられている人たちであるとお聞きになっている。そこで遠い先祖の天皇の御代から、今の朕の御代においても、天皇をお守りする側近の兵士とってお使いになる。そのようであるから子は先祖の心のような心となることが、子としてあるべきことである。この心を失わないで明るく淨い心をもって仕え申し上げよと、男女あわせて一、二人の位階をお上げになる。また五位以上の官人の子らの位階をお上げになる。」(77 ~ 78 ページ。)

なお、大伴家持は、歌の中で詔書の「のどには死なじ」を「かえりみはせじ」と変えている。

大伴家持の歌一首とそれに続く短歌とは、次の三首を指す。(前掲書『新編、日本古典文学全集、第 9 巻』)



「ますらをの 心思ほゆ 大君の 命みことの幸さきをく一に云ふ、「の」> 聞けば 貴みく一に云ふ、「貴くしあれば」> (ますらおの 心とはこういうものと知った 大君の 忝い仰せをくまた「が」> 承れば貴くてくまた「貴くあるので」>)」(259 ページ。)

「大伴の 遠とほつ神祖かむわやの 奥おくつ城きは 著しるく標立しめたて 人の知るべく (大伴の 遠い先祖の 御みたま霊屋やは はっきり印をせよ 人がそれと知るほどに)」(260 ページ。)

「天皇の 御代みよ栄えむと 東あづまなる 陸奥山みちのくやまに 金花くがね咲く (天皇の 御代みよが栄えるであろうと 東国あづまの陸奥みちのくの国の山に 黄金くがねの花が咲いた)」(260 ページ。)

なお、大伴家持の「陸奥国みちのくのくにで金が出たとの詔書しやうしよを寿ことほぐ歌一首と短歌」は、「天平感宝元年てんぴやうかんぽうの五月十二日に、越中国えつちゆうのくに守のかみの館やかたで大伴宿禰家持が作ったものである。」(260 ページ。)と最後に記される。

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」に印象的な場面がある。行方不明の木口が、やっと帰隊し、仲間の喜びは絶頂に達し、木口の世話が一通り終わって、木口が胸をあげ、仰向けあむになって寝ころんだ時、兵士の一人が「君が代」を歌い出し、それにつられて全員が唱和する場面である。

「君が代」の元歌は、『古今和歌集』第7巻、「賀歌がのうた」「題よみびとしらず、読人よみびとしらず」の「わが君は千代に八千代にさざ細れ石いはほの巖なと成りて苔こけのむすまで」であるといわれている。

『新編、日本古典文学全集 第11巻』(小学館)、『古今和歌集』(1994年)の現代語訳は、次の通りである。

「わが君のご寿命は千代、八千代にまで続いていただきたい。小さい石が少しずつ大きくなり、大きな岩になり、それに苔が生えるまでも。」(148 ページ。)

また、次のような解説がつけられている。

「『和漢朗詠集』にも採られた、国歌『君が代』のルーツ。『西陽雜俎』の説話を取り入れるとともに、『万葉集』228の『妹いもが名は千代に流れむ姫島の小

松の末に苔生すまでに』からの影響もある。奈良時代の『懐風藻』に四十の賀を祝った詩が見え、朝廷では嵯峨天皇の賀が最初である。中国の習慣であった算賀の祝いが日本の知識人に行われ、最初は詩が作られたので、後に和歌に代っても中国風の知識を詠むことが喜ばれたのであろう。」（148 ページ。）

なお、頭注には、五つの項目の説明があるが、本稿に必要な三項目を紹介する。「(1)『君』はこの歌を贈る相手。巻頭の四首をはじめ、賀の歌ではしばしば用いられるが、天皇をさすこととは限らない。→21・38。」「(2)『代』は寿命、年齢。『千代に八千代に』は、命が永遠に続くことを祈る意。」「(3)『西陽雑俎』（中国の唐代の伝奇小説集）に、水中から拾ってきた石を仏殿に長年置いたら、大きな岩になったという伝説が見られる（古今余材抄）。」

頭注（1）で、用例としてあげられた『古今集』の和歌（21）と（38）は、次の通りである。（21）「君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ」（前掲書、38 ページ。）（38）「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（前掲書、43 ページ。）

## V

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」、「土と兵隊」で流されている音楽「海行かば」の背景には、『古事記』、『日本書紀』を踏まえることによって、歌詞の内容はより明確になる。

『日本書紀』巻第3は、神武天皇一代記である。『新編、日本古典文学全集、第2巻』（小学館、1994年）、『日本書紀（1）』の「古典への招待、『日本書紀』を読む」によれば、次の通りである。

神武天皇が、「日向を出て、瀬戸内海を経て、河内からの大和入りができず紀伊半島を迂回して、熊野から北上する。道中兄たちを失い、悪神の加害を脱し、大和入りをしてから幾多の強敵と戦い、天佑神助により大和を平定、ついに橿原宮で即位、媛踏鞴五十鈴媛を皇后とし初代天皇となる。『来目歌』

八首がある。」（9ページ）。

前掲『日本書紀』の中で「天皇軍は大和進撃を再開するが難渋。そこに天照大神の夢のお告げで頭や八咫鳥たからすが道案内として出現し、ついに大和に到達する。」（前掲書、204ページ）と、頭注でまとめられた、次の文章の中に大伴家持の先祖が登場する。次の通りである。

「この時、大伴氏遠祖日臣命ひのおみのみことは、大来目おわくめを率いて大きな兵庫の將軍として、山を踏み道を開いて鳥の行方を求め、これを仰ぎ見ながら後を追って行った。そうしてついに菟田うだの下県しもつあがたに到着した。道うがを穿うちながら進んだのでその地を名付けて菟田の穿邑うだ（略）うかちのむらという。天皇は勅みことのおりして日臣命ひのおみを褒賞されて、『お前は忠誠にして武勇の臣である。またよく先導の功績があった。これからは、お前の名を改めて道臣みちのおみとしよう』と仰せられた。」（前掲書、205～206ページ。）

また、『新編、日本古典文学全集 第1巻』（小学館1997年）によれば、『古事記』中巻の「神武天皇」の項に次の文章がある。

「そこで、大伴連おわたものむらじらの祖先道臣命みちのおみのみことと久米直くめのあたらの祖先大久米命おわくめのみことの二人が、兄宇迦斯えうかしを呼び寄せて、罵ののしって言うには、『きさまが御子のためにお造り申し上げた御殿の中には、きさまが先に入って、お仕え申そうとする様子をはつきりお見せしろ』と言って、そのまま大刀たちの柄つかを握り、矛ほこをしごき、矢やをつがえて、御殿の中に追い入れた時に、兄宇迦斯えうかしはたちまち自分の作った押機おしに打たれて死んだ。そこで、すぐにその亡骸なきがらを引きずり出してばらばらに斬り刻んだ。」（151～152ページ。）

以上の文章は、前記『古事記』上巻の次の文章につながるものである。

「そこで天照大御神あまてらすおみかみ・高木神たかぎのかみは天津日子番能邇々芸命あまつひこほのになぎのみことに詔命を下し、邇々芸命たかあまのはらは高天原の堅固な神座を離れて、天空やえに八重やえにたなびく雲を押し分け、威風堂々と道を選び、途中、天の浮橋あめにすくくとお立ちになって、そこから筑紫つくしの日向ひむかの高千穂たかちほの靈峰あまくだに天降りなされた。そこで、天忍日命あめのおしひのみことと天津久米命あまつくめのみことの二人が、堅固な鞆ゆきを背負い、頭椎かぶつちの大刀たちを腰あめに下げ、天のはじ弓ゆみを手に

持ち、天の真鹿兎矢あめ まか こやをたばさんで、天孫のおん前に立ってご先導申し上げた。ちなみに、その天忍日命はくこれは、大伴連わおとものむらじらの祖先である。天津久米命はくこれは、久米直くめのあたしらの祖先である。」（前掲書、117ページ。）

「海行ゆかば」の歌詞「海行かば、水漬くかばね、山行かば、草むすかばね、大君の、辺にこそ死なめ、かえりみはせじ」の歌は、上記『古事記』、『日本書紀』によれば、次のように理解できる。

「陸奥国で金が出たとの詔書を寿ぐ歌一首と短歌」は、天照大御神の直系、神武天皇が、日向を出て、瀬戸内海に経て、難波に到り、大和平定を行ったことを背景に、神代以来、天皇にお仕えしたことを踏まえた大伴氏の歌なのである。大伴家持が先祖を誇りにして作った歌の中に登場する「海行かば」の歌は、武門の家柄、大伴氏抜きには語れない。天皇のおそばにお仕えする軍人の歌なのである。

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」で、死んだと思っていた戦友が無事帰隊し、兵士の一人が「君が代」を歌い出し、全員が唱和するのを、印象的な場面として紹介した。「君が代」と結びつけて、元歌が収められている『古今和歌集』にまで遡って考えれば、「君が代」の歌は、天皇の軍隊、大伴氏とその軍団、明治以降においては職業軍人の域を越えて、「海行かば」で念頭におかれた、天皇にお仕えするということがらが、国民一人ひとりにまで拡がっていることがわかる。「君が代」は、天皇をたんに賀する歌ではなく、国民一人ひとりが、武運長久でなければならぬことを語っていることが、『古今和歌集』までさかのぼることによって明確になるからである。しかも、「海行かば」の曲が、映画「五人の斥候兵」の最後に合唱で挿入されている意味は、天皇の軍隊が、国民一人ひとりから構成されていることを確認していると、とれる。

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」は、原作が高重屋四郎、即ち田坂具隆自身であり、北支らしい部落や城壁、城門のデザインは、美術の松山崇の苦心作であり、戦場という場面の原野や川や、雨の情景は、名カメラマン伊佐

山三郎の手腕によるところが大きい（前記、滋野辰彦氏の解説による）。したがって、田坂具隆の映画「五人の斥候兵」は、フィクション（創作）の世界なのである。

他方、田坂具隆の映画「土と兵隊」は、火野葦平のベストセラー小説を原作にしている。火野葦平は、日中戦争での体験に基づき、『麦と兵隊』・『土と兵隊』（1938年）、『花と兵隊』（1939年）の火野葦平「兵隊もの」3部作を完成する。『土と兵隊』は、1937年11月5日、杭州湾上陸の16日前から、語り出される。しかも、原作『土と兵隊』には、サブタイトル「杭州湾敵前上陸記」と記されている。田坂具隆の映画「土と兵隊」は、前作「五人の斥候兵」とは違い、具体的事実に基づいて作られている故、純粋な創作の世界ではない。

『日本映画監督全集』（改訂版、1980年、キネマ旬報社）に、「土と兵隊」について、次のように述べられている。

田坂具隆は「火野葦平の原作により中国大陸へロケ、自ら兵隊のあとついて歩き、戦争は歩くことなりと発見する。泥濘の中を重い背のうを背負い、その前に待ちもうける死へ向かってひたすら歩き続ける描写を1万フィートも見せるこの映画は、戦争リアリズムの代表作として、彼をライバルであり親友の内田吐夢と並ぶトップ監督の座に押し上げた。（木村）」（246ページ。）

田坂具隆の映画「土と兵隊」は、場所は中国大陸へのロケで、内容は、火野葦平の『土と兵隊』を原作とし、田坂具隆の実体験によって裏付けられている。

映画の最初と最後に流される「海行かば」には、歌詞はない。映画の中で歌われる軍歌は、戦意高揚のために作られたものばかりである。「海行かば」は、本来、「神武東征」として日本国内の歌であったものが、歌詞をなくすことによって、アジアへ、中国大陸への侵略の歌となる。しかも、戦死する一兵士に、「天皇陛下の御ために」という言葉を吐かせることによって、軍隊が、国民一

人ひとりから構成されている日本の国から、天皇一人が統治する日本の国への転換がなされていることになる。国民と天皇との一体感に変化がみられるのである。

また、「五人の斥候兵」では、映画の画面に姿をみせなかった馬が、「土と兵隊」では画面に登場し、同じ天皇の兵隊でありながら、上官は馬で、兵士は徒歩で行進することによって、軍隊における階級制が示される。

その中で、田坂具隆は「土と兵隊」で、敵弾で負傷した兵士と、病気の胃けいれんで脱落した兵士両者を描き、原隊に復帰した兵士は、病気脱落者であることを示すことによって、戦争の肉体的損傷の悲惨さを静かに語りかけるのである。映画「土と兵隊」の最後で、行軍開始の時点で出た血便がでなくなった、と兵士達に語らせることによって、人間の肉体の外表面と内表面を区別し、内表面の問題が心身の鍛えにハードルを高くすることを課することによって、解決されることはあっても、刀、銃等で傷付けられた外表面の傷はたやすく治るものではなく、場合によっては死に至ることを示しているのである。

### おわりに

私は「美しい国、日本—経済学者、J.M.ケインズによりながら—」（『福山大学図書館報、第4号』2006年9月）の文章の中で、次のように述べた。

「私は、福山大学で地域開発論を担当し、広島県東部のいわゆる備後三市、福山・尾道・三原は、福山市が広島県東部の政治、経済、科学技術、文化の中心都市であり、尾道市は国際観光都市、三原市は自然環境都市を目指すべきであろうと講義してきた。

福山市の文化とは、狭義の文化、つまり精神文化を指し、真善美、いいかえれば真理、善行、美を追求する意味なのである。

尾道市の観光とは、中国の書『易経』にならえば、尾道市の風俗の美を見ることがあり、尾道市の徳を最も表現できるのが、自然環境の美と人々の優

しさなのである。したがって、尾道市が標榜している「国際芸術文化都市」では、尾道市が市立の大学を擁し、学術・教育を尊重していることを、寺々の都市であるという意味での宗教心をも無視しているのではないかと思えるのである。尾道市が、文学の都市、絵画の都市、映画の都市、すなわち芸術の都市から一步抜け出し、国際観光都市として、尾道市の風俗全体が世界遺産に登録されることを目標にすれば、尾道の国際性は一般性を持つことになるであろう。

三原市の自然環境は、単なる自然環境の美だけを強調しているのではなく、都市を見る場合、産業基盤、生活環境基盤、保健・福祉・医療基盤、教育・文化基盤、行財政基盤、広域基盤を問題にするが、福山市、尾道市に比較して三原市の特徴を打ち出すとすれば、生活環境基盤の充実に基づく自然環境の美を意味しているのである。その意味において、三原市のキャッチフレーズ「海・山・空、夢ひらくまち」は、自然環境都市を踏まえ、海・空で国際性をも表現し、自然環境の真の保全には、戦争のない平和な社会を築かなければならないことを国際的に表明していることになる。」（1～2ページ。）

田坂具隆の映画「五人の斥候兵」、「土と兵隊」から学んだことを、前記三原市、尾道市、福山市に当てはめて、まとめとしたい。

三原市の場合、自然環境都市と位置づけたのであるが、「海・山・空、夢ひらくまち」で「海」、「空」が国際性を表現していると理解したが、国際性とは、広域基盤を考慮しての事柄であり、自然環境の真の保全は、戦争のない平和な社会を築くことであるとしている以上、「海行かば」は、軍隊が外国へ出かけて行くことではなく、「空行かば」と合わせ考えると、国際貿易の円滑化をベースにすえた上で、人、物、金、情報の流れでの世界平和の樹立を意味しているのである。

尾道市の場合、国際観光都市と位置づけたのは、尾道市の自然環境の美と人々の優しさを裏付ける、文化の重要性を指摘しているのである。尾道市の

文化とは、前記文章では、現在の学術、芸術、宗教、教育を問題にしているが、本稿で考察した田坂具隆の映画「五人の斥候兵」「土と兵隊」を考慮に入れば、芸術を映像、音楽、文学で、本稿で問題にした先学の日本の古典研究の活用は、学術をも強調していることになる。尾道の観光の説明に、中国の書『易経』を使ったが、田坂具隆の映画においては、日本の書『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』が重要な役割を果たしており、とりわけ「君が代」の元歌は、『古今集』だけではなく『和漢朗詠集』にも採用されていることは、日本の風俗の美を語るには、（和）歌で、中国の風俗の美を語るには、（漢）詩で、語るのが本来であることがわかる。

福山市の場合、広島県東部の政治、経済、科学技術、文化の中心都市であると位置づけたが、田坂具隆の映画では、日本刀と青竜刀で、日本文化と中国文化の違いを武器で示していることから、わが国においては、日本文化に裏付けられた政治、経済、科学技術を目指さなければならないことが示されているのである。日本文化に裏付けられた政治、経済、科学技術とは、国際的に日本を位置づけた場合、国際金本位制との関係に目を向けてみる必要がある。1931年以降金本位制離脱下、わが国は、金本位制から離脱した通貨制度に基づく政治、経済の運営であり、わが国が、通貨価値の安定と通貨の円滑な流通を国民経済に保証することを目指さなければならなかったのである。わが国が、通貨価値の安定と通貨の円滑な流通を目指そうとする限り、両者に混乱を引き起こすことが予測される戦争は、絶対に回避されるべきであったことになる。大伴家持が、和歌の中で歌った金は、大仏鑄造に必要なものであったが、1931年以降、追求されるべきは、資源としての金の獲得ではなく、通貨を軸にした国民経済の安定を求める政治だったのである。

田坂具隆の映画で活字の尊重が、「陣中日誌」、「戦場からの手紙」で示されていると考えれば、以上の本稿の展開が可能であったのは、田坂具隆監督が映画製作に対し、きわめて知的に対応していたからであるといえる。ちなみに、



田坂具隆監督の前記両作品に登場する「海行かば」は、『万葉集』の第18巻から採られている。『万葉集』の第17から第20巻は、大伴家持の「歌日誌」と一般的に言われているものである。

## ◎参考文献

### （1）映画関係

- ①『日本映画作品全集』（キネマ旬報社、1973年）
- ②『日本映画監督全集（改訂版）』（キネマ旬報社、1980年）
- ③『日本映画、200』（キネマ旬報社、1982年）

### （2）小学館版『新編、日本古典文学全集』

- ①『古事記』（山口佳紀・神野志隆光訳、1997年）
- ②『日本書紀』（小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守訳、1994年）
- ③『万葉集』（小島憲之・木下正俊・東野治之訳、1996年）
- ④『古今和歌集』（小沢正夫・松田成穂訳、1994年）
- ⑤『和漢朗詠集』（菅野禮行訳、1999年）

### （3）『講談社、学術文庫』

- ①『古事記』（次田真幸訳、1980年）
- ②『日本書紀』（宇治谷孟訳、1988年）
- ③『続日本紀』（宇治谷孟訳、1992年）
- ④『古今和歌集』（久曾神昇訳、1982年）
- ⑤『和漢朗詠集』（川口久雄訳、1982年）

### （4）河出版『日本古典文庫』

- ①『古事記・日本書紀』（福永武彦訳、1976年）
- ②『万葉集』（折口信夫訳、1976年）
- ③『古今和歌集』（窪田空穂訳、1976年）

日本とアジア（1937～1940年）

（5）岩波版『新日本古典文学大系』

- ①『万葉集』（佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注、2003年）
- ②『続日本紀』（青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注、1992年）
- ③『古今和歌集』（小島憲之・新井栄蔵校注、1989年）

（6）日本の古典関係

- ①石川淳『新釋古事記』（角川書店、1983年）
- ②井上光貞監訳『日本書紀（上）』（中央公論社、1987年）
- ③澤瀉久孝『萬葉集注釋、卷第十八』（中央公論社、1967年）
- ④伊藤博『萬葉集釋注九、卷第十七・第十八』（集英社、1998年）